

おたねさん、もう薪は是れだけしか無いぞや。

ト是を聞いて、おたね思入あつて、

たね わたしやお前が好きになつたと言うでは無いが、もう毛嫌ひをしては居られぬわいなア。

栗作 何と言はつしやる。

たね 惚れた同士が夫婦になると限つた譯でもない事故、ツイ一通りの夫婦になるには、お前とわたしでならぬ譯も御座んすまい。

栗作 エッおたねさん、ソリヤ本氣かえ。

たね お前に根負けがしたわいな。

栗作 わしと夫婦に成つて下さるかえ。(ト喜んで傍へ寄る。)

たね 成る事は成るけれど、わたしの頼む事も聞きて下さんすか。

栗作 聞く段かいなく。お前の頼みとは分つて居る。よい着物を拵へて、我儘をさせてくれであらう。そんな事は何でも無い。朝はわしが先へ起きて、寢所の中で御飯を喰はせませうぞや。

たね イエ／＼。わたしの事ぢやない。父さんが一心砕いて居る赤繪、お前は出来ると思ふかえ。

栗作 わしはどうだかと氣遣ひでなりませぬ。

たね わたしもさうは思うては居るが、父さんが止める心が少しも無い故、お前と二人で父さんを助けてあげねばならぬぞえ。

栗作 ソリヤ、言はずとも知れた事ぢや。お前の父さんはわしにも父さんぢや。

たね よう言うて下さんした。それが本統なら、お前と夫婦に成りませう。

栗作 忝い／＼。併、あれ程嫌つて居たお前がかう急に變つて來たは、おつうさんの引き合せかも知れぬ。

たね 併、今直ぐではないぞえ。

栗作 急ぎはしません、そんなにゑろう急ぎはしません。

たね 其の替りあれを貸しておくれ。

栗作 あれとは。

たね お前が内證で溜めてあるお金を父さんに貸してあけておくれ。

ト是を聞き栗作當惑の思入にて、

栗作 持つて居さへすりやア安い事ぢやが、わしの金はもう一文も無い。

たね あのお金を何時何に使うて仕舞うたのぢやえ。

栗作 言うては成らぬと親方に口止はされたが、言はねばお前の得心がいくまい故、打ち明けて言ひますが、わしが溜めた金は残らず親方の手へ渡し赤繪の元手に成つて仕舞ました。

たね そんなら出来ぬと知りながら、溜めたお金を父さんへ貸してあけて下さんしたか。(ト思入あつて)栗作さん、今こそ本統にお前の女房ぢや。

栗作 おたねさん、何にも言ひませぬ。

ト兩人手を取り合ひて思入。此の話の中に窯の火消えて仕舞ふ。二人心づかずに居る。此の時下手より柿右衛門腕を組みながら出て来る。兩人分れて、

たね 父さん、どうで御座んしたえ。

柿右 何處へ行つてもことわられた。町の人はわしが事を氣違ひぢやと言うて笑ひをつた。わしが此の南河原へ始めて窯を築いた頃は、此の有田はさび果て、見る影もなかつたを、南京焼の秘傳を教へ再興した有田の繁昌。此の土地に取つてはわしは恩人ぢや。その柿右衛門を氣違ひ呼はり。あゝ義理も恩も無い世の中ぢや。

ト窯の火の消えたを見て、

二人は何をして居つた。此の窯の火が消えたら、柿右衛門が望も消え、命も消えるを知りをら

ぬか。

ト是にて兩人もびつくりして薪を取りにゆき、

栗作 もう薪が無かつた。

柿右 そこらの古木を持つて来い。

栗作 合點ぢや。

ト柱を引きぬいて、窯にくべる。けれど濡つて居て燃えあがらず。

たね さつきの雨でちつとも火氣がたゝぬわいな。

柿右 今一時か二時となり、僅かな薪のないために、我が望も叶はぬか。可愛い娘は海へ身を投げ、千辛萬苦の窯の火は落ち、神も佛も天道様も御座らつしやらぬか。

トどうと成る。おたね傍により、

たね 父さん、しつかりして下さんせ。

ト介抱して居る。此の時向うより以前の五兵衛、窯主利右衛門、善五郎、文藏を連れて、足早に出で来り、

五兵衛 柿右衛門、さつきの返事はどうぢや。それ次第で薪を運ばせやうと思ひ此の衆をつれて来た。

名工 柿右衛門

利右 コリヤ、窯の火が。

善五 落ちたぞよ。

ト是にて柿右衛門きつと成り、

柿右 假令窯の火は消えても、此の胸の火が消えぬ中は、五兵衛さんから一把の薪も貰ひませぬ。

五兵 まだ瘡我慢を言つて居るのか。

善五 愈々こなたは。

善五 氣違ひぢや。(ト嘲り笑ふ。)

文藏 たね モシ父さん、お前が一心籠めた窯。ヒヨツと一つでも出来て居たなら、物怪の幸ひ。

栗作 さうぢやく。念晴しに口を開けて見ませう。

ト栗作、おたれにて目蓋を剥がし、窯の口をあけ、出来損ひの焼物を取り出して見て、がっかりして居る。此の前から正面の火の手愈々盛んに成り、今は天を焦す程に成る。向うより序幕の手代傳

六、向う鉢巻にて片肌ぬぎ、提灯を持つて息を切つて走り來りて、

傳六 旦那様、大火事で御座ります。

五兵 伊萬里が火事か、さうして内は。

傳六 お店は大丈夫で御座りますが、中里様が丸焼で、私が御見舞ひに参りましたら、系圖を焼いて仕舞つたと仰言つて、御座りました。

ト是を聞き、五兵衛びつくりして、

五兵 系圖を焼いた。アノ系圖を。

トがっかりした思入。

傳六 まだ一つえらい事が御座ります。若旦那が燃えさかる火の中へ飛び込んで。

五兵 焼け死んだか。

傳六 ハイ。

五兵 アノ火の中へ。

ト正面の火の手を見て、ぼんやりと成る。

たね 父さん、平三郎さんも死なしやつたといなア。

柿右 オ、おつうは海へ、平三郎殿は火の中。ム、。

ト思入あつて立ちあがる。此の時栗作窯の中より金銀五色にて盡きたる皿を見附けて持ち來りて、

栗作 親カコレ見さつしやれ。

名工柿右衛門

ト柿右衛門に渡せば受け取り見て、

柿右 オ、是ぢや。

五兵 エツ。

柿右 十年此の方、夢に見た赤繪が出来た。

ト嬉し泣きに泣く。五兵衛ツカ／＼と寄るを睨みつけて、

五兵衛さん、此の皿は娘の命。わしが涙。千萬無量の思ひを籠めて焼き上げた日本の寶、未代の光り、赤繪の祕傳と諸共に、こなたの命はわしが握つた。

五兵 柿右衛門さん、重々わしが悪るかつた。

ト平舞臺に坐る。柿右衛門は眼の前におつうを見る如き思入にて、

柿右 おつう。われが敵は取つてやつたぞ。

ト皿をおたれに渡し兩手を面にあて、泣く。おたれ、栗作は其の左右に纏る。五兵衛は悔悟の思入にて突伏して仕舞ふ。火の手はますます強く舞臺一面眞赤に見へる。上手の奥にて遠く早鐘を聞かせて。

幕

## 榎本虎彦略傳

父榎本虎彦は慶應二年正月十日和歌山市の一隅に生れた。祖父に依り家財を蕩盡された父の家は、父が生れた時は赤貧洗ふが如き境遇にあつたので、十分なる教育を受ける事は出来なかつた。父は自力に依り郷里の師範學校を出ると、直ぐ直川村在のとある小學校の教員となつて、生活費を求めねばならなかつた。父としては都會に出て自己の目的たる文學に依つて、身を立てたいと云ふ心願は、その頃よりあつたが生活状態は到底許さうとしなかつたので、止むを得ず郷里の學校にその身を置いて、機會を待つより外は無かつたのである。然し容易にその機は恵まれて來なかつた。却て益々上京の目的から遠ざかつて行つた。それは父が更に山奥の分教場の主任兼教員として行つた事である。其邊は可成村里より離れて居る處であつた。二三十人の生徒の教員であつた父は、その山奥に半年間の寂しい生活を續けたが、どうしても父の心より文學者たらんとする志は消えなかつた。どうしても東京

へ行きたい」と云ふ思ひで絶えず彼の頭を悩まして居た。然し遂に大なる決心をして郷里を出る事にした。教員としての生活から、全然離れて郷里から出ると云ふ事は、父の境遇としては非常な無理があつたらしい。生活保證の無かつた父としては、老いたる父親を唯一人郷里に残して東京へ行く事は、随分無謀の行爲であつたらしいが、そのために心願である文學志望を棄て去るには忍び無かつた。遂に祖父の了解を得、凡てを將來に任して郷里から離れて仕舞つた。それは父が二十一歳の時であつた。

未來を夢見つゝ、遠い浪路を越して、横濱の埠頭に着いた父は既に望の達した如く如何に雀躍して喜んだ事であらう。始めて接した此の新文化の都會の人となる事は非常な喜悅であつたらしい。若い父の血は燃えた。假令如何なる艱難辛苦をしようとも必らず自分は文壇の覇將とならねばならないと思つた。それと同時に故郷に淋しく成功を願つて居る親の事を考へると父はどうしても目的を貫徹して喜びを與へねばならないと思つた。間もなく、父は有名な文學者の門弟たらんと、同郷の先輩である日報社長關直彦氏を訪れた。再三氏の家を訪れて遂に會ふ事が出来た父は、氏の紹介に依り當時一方の權威者であつた福地櫻癡氏の池の端の邸宅を訪れたが、容易に田舎出の一書生に面會さへしなかつた。幾度か足を運んだ事であつたらう。然し父は己が目的を棄て去らうとはしなかつた。或る時は門

の傍に一夜を過して氏と面會する機會を待たうとした事もあつたと、父自身が云つた事があつた。當時文學者として、一面政治家として豪奢を極めて居た櫻癡氏は絶えず遊里の人となつて、耽溺にその日々を送つて居たので、容易の事では面會出来なかつた。若し氏の夫人の同情を得て、氏との面會を取り計らつて貰はねば、恐らくその機會は無かつたであらう。兎に角、氏と面會する事の出来た父は、熱心に歎願した甲斐あつて氏の門弟となる事を許された。そして氏の勤めて居る日報社へ、記者見習として入社する事になつた。斯くして東京に於ける生活の第一歩は始まつた。

そして苦しいながら多少共生活の保證が定まつてから、父は新聞社の激務の餘暇に、當時芝増上寺附近にあつたとか云ふイーストレーキ氏の許に通ひ、英語學を修める事に執心した。その間作品を作つて只管文壇への第一歩を築かうとして居た。

明治二十三年、櫻癡氏が新たに劇場改革の名の下に木挽町に建てられた歌舞伎座に立作者として、經營者として入る事になつたので、門弟である父も氏の部下として行く事になつた。當時劇界に竹柴派が勢力を振つて居た如く、矢張歌舞伎座の作者部屋も殆ど彼等の勢力範圍であつたので、門外漢の父はどの様に嘲笑輕蔑された事であらう。然し一旦決した文學者志望の目的に到達するまでは、どの様に輕蔑されやうとも忍ばねばならないと思つた。因習惡風のある劇場生活は、稍ともすると父の心

に失望を與へた。幾度か飛び出さうとしたらしい。因習に凡てを束縛する劇場の空氣は父に堪へられなかつた。然し親の事を思ふと何事も辛棒して時機を待つより外は無かつた。斯くて、一年二年と劇場の人となつて生活する内に表面環境と妥協する様になつた。然し彼等と同じ生活境遇に甘じては居なかつた。唯それは方便にすぎなかつた。その間漸次竹柴派は益々その勢力を擴けて行つた。そして遂に櫻癡派と竹柴派との間に面白くない事が起つたらしい。父は諷然劇場生活を離れて仕舞つた。

そして櫻癡氏が主筆となつたやまと新聞社（當時日の出新聞？）の記者として入社した。薄給の記者生活に入つた父は、可成りに忙しいその生活の餘暇に多くの小説を書いて、櫻癡氏の名で出版して勉學の費用と生活費にあて、居た。「みだれ焼」「薄命の花」等の小説はその當時の作品であつた。

然し間もなく父は再び劇場の人となる事になつた。折柄人氣役者として神田三崎座に評判をとつて居た女優市川九女八の附作者となつたのである。短い年月であつたが彼女のために可成りの脚本を書いて提供して居た。「安宅の關」（勿論今日市川中車の演るのとは多少違ふさうだ。）は彼女のために書いたものであつた。そして一方に生活のためか土佐の土陽新聞に長篇小説を發表して文筆を練つて居た。

その後多分明治三十一年再度歌舞伎座へ歸つた。その時は櫻癡氏一派のみの作者に依つて占められ

て居たので、比較的心持よく働く事が出来たらしい。それ以來父は極度の生活上の辛苦はあつたが、一意専心劇場のために力を盡して働いた。然し新作の上演は主に立作者であつた櫻癡氏の作品のみであつたので、明治三十七年「安宅の關」を改作して上演するまでは、たゞ氏の代作か手助けをするにすぎなかつた。然し、三十七年以後櫻癡氏の死ぬまでの間、四五種の作品を書いて上演して居るが格別評判されるものは無かつた。たゞ中村芝翫のやつた「南都炎上」は史劇として纏まつたものとしてやゝ評判された。

明治四十年一月櫻癡氏が死んだので、歌舞伎座に立作者が無くなつたので、その門弟として長い間座のために努力して來た父は、當然その地位に坐る事になつた。此處に於て父は假令文壇の覇將とならうとした過去の夢は實現されなかつたが、當時第一位の劇場の立作者としての地位を得る事が出来た。そしてある程度までは自由に自分の作品を發表する事が出来る様になつた。

父が立作者となつたその興行にやつた仕事は、以前小説として發表した「みだれ焼」の脚色であつた。梅幸、芝翫、羽左衛門等に依つて演じられた此の脚本は、非常な好評を博し當時としては珍らしい程の大入をとつた。斯くして父の立作者としての門出は華々しいものであつた。

其の後書いた作品の中で「女歌舞伎」「經ヶ島娘生贄」「豊臣天秀尼」「都歌舞伎」等は優れたもの

である。中にも大正元年秋仁左衛門のために書いた「名工柿右衛門」の如きは、別して非常な好評を博したもので、父の代表作として永久に残るものとされて居る。

父が立作者として作品を発表してより、胃癌のために立つたあはす、遂に大正五年十一月十六日此の世を去るに至つた時までの、十年間に書いた作品は大小五十六種の少数であつた。が絶えず劇場のため劇壇のために心を遣ひ、遂に思ひを残して死んで行つた程、父の全生活は劇場の爲に捧げられてゐたのである。(榎本茂)

## 卷 末 に

「女歌舞伎」は、明治四十一年十月歌舞伎座で、一番目に上演されたものである。桐大内藏は中村歌右衛門（當時芝翫）、烏丸通廣は松本幸四郎（當時市川高麗藏）が扮してゐる。この時には、別に一幕本多中務物見の場といふのが最初にあつて、千姫と通廣との関係がもう少し詳しく説明されてゐたやうである。その本は一昨年の大震災に焼失して了つた。そこで止むを得ず、東京での二度目の上演、大正五年二月新富座の時のやうに、三幕物としてこの巻に收めて置いた。書卸の二幕目が、これでは序幕になつてゐる譯である。併しそれ以外に、書卸のものと殆ど同じである。唯強ひて異つてゐるところを云へば、この本の序幕の初めの方が、書卸の二幕目と多少違つてゐる。それは新富座の時、俳優の都合か何かで序幕を取つて了つた爲に、二幕目の方へ書き加へて、それを序幕にしたからである。それも上演の際にはそのままには行はれなかつたのである。それから、これも大詰の初めの方

で、人物の出入が舞臺では、もつと簡單になつてゐたやうである。

「殿様勘次」は、尾上菊五郎、中村吉右衛門に依つて、明治四十三年七月市村座に上演された。主人公勘次は云ふまでもなく菊五郎である。舞臺に演じられた時は、四幕目に肥前血の瀧の場といふのがあつた。天草討伐軍に加はつた勘次が、大立廻りをやるところである。これは舞臺にかける間際になつて、丁度盆興行ではあり、藪入を喜ばせるやうな場面が必要であつたのだらう。急に書き足したものののだが、これ亦、震災で焼いて了つたのである。

「來山」は、大正三年六月中幕として歌舞伎座に上演された。小西來山には片岡仁左衛門が扮してゐる。中村又五郎の清兵衛、市川松蔭の小ふぢ、中村歌右衛門の土岐伊豫守、市川左團次の有村一學、市川段四郎の番頭といふ顔觸だつた。

「鼓の里」は、大正二年六月歌舞伎座の二度目に上演された。片岡仁左衛門が綾小路三位雅信、尾上榮三郎の金春六之丞、市川段四郎の勘兵衛、尾上菊五郎の捨藏、守田勘彌の三之助、尾上菊次郎（當

時笑雀）の倉子だつた。

「裏表心曲尺」は、大正二年十月歌舞伎座二番目狂言として、中村歌右衛門のおつや、市村羽左衛門の清次、片岡仁左衛門の藤兵衛、市川中車（當時八百藏）の伊織、市川段四郎の宮内といふ手揃ひの大一座で、上演されたものである。

「名工柿右衛門」は、大正元年十一月歌舞伎座に上演されたものである。片岡仁左衛門の柿右衛門がその持味で爲活した狂言である。作者のものでは、一番度々脚光を浴びるものである。それがいつも仁左衛門の柿右衛門である。それ程仁左衛門はこの作の中に自分を打込んでゐる。ことはつて置きたいの、大正六年一月の明治座で、二度目にこれを上演した時に、序幕を書き換へてゐる。それはその後行はれてゐる伊萬里海岸の場で、氏の弟子である堀美雄君の手になつたものと記憶してゐる。これには、令息茂君の考へで書卸のまゝを載せてある。

榎本虎彦氏は私の師匠であつた。氏の弟子として、私は歌舞伎座の作者部屋に暫くゐた事がある。



併し、餘り好い料簡の弟子でなかつた事は、その後私が歌舞伎座を飛び出してから、づる／＼べつたりに縁が切れて了つたのでも分る。無論私の方が横着だつたのである。そんな譯で、氏とは深入した交渉を持たずに了つたのであるが、氏の令息茂君や、歌舞伎座時代の兄弟子である堀英雄君とは、それからずつと親しい交際を續けてゐる。

さうして、先生の作を纏めて、一冊の本にする事になつたのも、茂君に私が相談して、堀君の賛成を得てやつた事である。本當を云へば、この編纂の事も、堀君にやつて貰ふのが一番いゝと思つたのであるが、同君はその後文筆の方面を見限つてゐるやうだし、一つはこのシリーズの話があつて、その中へ入れるといふ事になつたので、私が編纂校訂の事に従つたのである。

この巻を読んで見れば分るやうに、どの作も大抵それ／＼粉本がある。さうして多くは多忙の間に座附俳優の爲に書いたものばかりである。従つて作品の價値などよりは、生きた演劇史として見る時に、非常に興味がある。作者も決して藝術的價値を求めてはゐなかつたと思ふ。

堀君といへば、美雄君は、先生に取つて實に得難い助手であつた。明治四十四年あたりからの、先生の作に、どこか若々しい熱情の影の動いてゐるのは、同君の力であるといつても、過言でないと思つてゐる。殊に、先生が不起の病に倒れてからは、この師匠と弟子とは、他人同志が達し得る、最高

とまでは行かないまでも、恐らく最上の友達の世界に、相抱いてゐたのである。堀君を通じて聞いた、最期の半月位前の先生は、不思議な程に輝かされ昂揚された精神の主人であつた。若し、先生があゝの永久の床から、二度と起き上る事が出来たらば、先生の仕事に必ず本質的なものが、加はつたに相違ないと信ずる。併し、運命はいたづら者ともいふのだらう。遂に先生は死んで了つた。さうして、その後堀君も歌舞伎座の作者部屋を去つて了つたのである。それを、私は、先生の爲に、本當に惜しむ者である。

今度も、この本の校正を、一度でもいゝから、同君に目を通して貰ふと思つてゐたのだが、特に出版を急ぐ事になつたので、それをやつて貰へなかつたのは残念であつた。(濱村米蔵)

## 榎本虎彦著作目録

- 一 櫻の御所 (三浦荒次郎小櫻姫、明治三十七年四月歌舞伎座初演) 四幕七場
- 二 安宅の關 (辨慶勳進帳、明治三十七年十一月歌舞伎座初演) 一幕二場
- 三 小袖幕元祿模様 (淨瑠璃、明治三十八年四月歌舞伎座初演) 一幕一場

- 四 堀川夜討 (土佐坊昌俊起請文の事、明治三十八年五月歌舞伎座初演) 三幕六場
- 五 富士太鼓 (富士の妻住の江、明治三十八年十一月歌舞伎座初演) 一幕二場
- 六 南都炎上 (平重衡の最後、明治三十九年五月歌舞伎座初演) 四幕五場
- 七 アラビヤ夜話 (喜劇、明治三十九年十一月歌舞伎座初演) 一幕三場
- 八 大成功 (喜劇、明治四十年三月歌舞伎座初演) 三幕七場
- 九 葵の上 (源氏物語、明治四十年十月歌舞伎座初演) 二幕三場
- 十 二人紳士 (喜劇、同上) 一幕一場
- 十一 みだれ焼 (小花吉五郎五月雨郷の経緯、明治四十年一月歌舞伎座初演) 五幕十二場
- 十二 競馬春廻魁 (社會劇、明治四十一年一月歌舞伎座初演) 三幕五場
- 十三 女歌舞伎 (桐大内藏烏丸通廣卿、明治四十一年十月歌舞伎座初演) 四幕七場
- 十四 兒供と犬 (喜劇、明治四十一年十月市村座初演) 一幕二場
- 十五 清正公 (豊臣秀頼加藤清正、明治四十二年四月歌舞伎座初演) 一幕二場
- 十六 繪櫃三重帷子 (おさい權三、近松の脚色、明治四十二年七月東京座初演) 三幕六場
- 十七 猫 (滑稽浄瑠璃、同上) 一幕一場

- 十八 經ヶ島娘生贄 (清盛の娘、明治四十二年十月歌舞伎座初演) 四幕四場
- 十九 豊臣天秀尼 (松ヶ岡天秀尼、明治四十三年一月歌舞伎座初演) 四幕八場
- 二十 殿様勘次 (植木屋勘次、明治四十三年七月市村座初演) 五幕八場
- 二十一 借兒 (喜劇、同上) 一幕二場
- 二十二 素人下宿屋 (喜劇、明治四十三年八月歌舞伎座初演) 一幕一場
- 二十三 兒煩惱 (喜劇、明治四十三年十月市村座初演) 一幕一場
- 二十四 間拔の泥棒 (喜劇、明治四十三年十一月市村座初演) 一幕三場
- 二十五 壽の門松 (與次兵衛吾妻近松の脚色、明治四十四年一月歌舞伎座初演) 三幕六場
- 二十六 吉野拾遺 (楠正儀の妻伊賀の局、明治四十四年四月歌舞伎座初演) 三幕四場
- 二十七 女浪人 (松川おのぶ松浦小五郎、明治四十四年六月歌舞伎座初演) 三幕九場
- 二十八 心中宵庚申 (お千代半兵衛、近松の脚色、明治四十四年六月歌舞伎座初演) 二幕二場
- 二十九 鎌倉武鑑 (菊地三郎安達娘朝霧、明治四十四年十一月歌舞伎座初演) 四幕六場
- 三十 寛永巷談 (居合拔平五郎、明治四十五年一月市村座初演) 四幕八場
- 三十一 白拍子祇王 (平家物語、明治四十五年四月歌舞伎座初演) 三幕四場

- 三十二 午 前 九 時 (喜劇、明治四十五年七月新當座初演) 一 幕 一 場
- 三十三 驛 鈴 (社會劇、ベルスの鐵案、大正元年九月市村座初演) 二 幕 三 場
- 三十四 名工柿右衛門 (陶工柿右衛門、大正元年十一月歌舞伎座初演) 三 幕 三 場
- 三十五 筑紫太刀風 (藤原隆家の娘阿古女、大正二年一月歌舞伎座初演) 三 幕 四 場
- 三十六 小 豆 島 (お妻の局佐々木信胤、大正二年四月歌舞伎座初演) 三 幕 四 場
- 三十七 鼓 の 里 (鼓師勘兵衛弟子捨藏、大正二年六月歌舞伎座初演) 一 幕 二 場
- 三十八 鎌 倉 合 戦 (史劇啞娘の戀、大正二年六月本郷座初演) 三 幕 六 場
- 三十九 裏表心曲尺 (指物師清次、大正二年十月歌舞伎座初演) 二 幕 四 場
- 四十 忠孝時雨の松 (松永彈正の娘松蟲林新六、大正二年十一月新當座初演) 三 幕 四 場
- 四十一 たそや行燈 (たそや紋彌幫間露幸、大正三年二月歌舞伎座初演) 二 幕 五 場
- 四十二 都 一 中 (都三中とその娘、大正三年三月歌舞伎座初演) 二 幕 四 場
- 四十三 來 山 (俳諧師來山、大正三年六月歌舞伎座初演) 一 幕 一 場
- 四十四 都 歌 舞 伎 (都傳内の妻、大正三年十一月歌舞伎座初演) 四 幕 四 場
- 四十五 柿原高尾 (柿原頼母と三浦屋高尾、大正四年一月歌舞伎座初演) 三 幕 六 場

- 四十六 蒔 繪 島 臺 (おその六三蒔繪師吉兵衛、大正四年一月歌舞伎座初演) 二 幕 六 場
- 四十七 櫻 み だ れ (お浦彌七と不動助兼、大正四年二月歌舞伎座初演) 二 幕 三 場
- 四十八 小松屋宗七 (櫻みだれの改作、大正四年五月大阪浪花座初演) 二 幕 三 場
- 四十九 増補山中平九郎 (山中平九郎の舞臺、大正四年六月市村座初演) 二 幕 五 場
- 五十 豊公大佛供養 (明智の娘盛姫、大正四年八月歌舞伎座初演) 二 場 四 場
- 五十一 妹背の鹿笛 (お三輪、大正四年十月歌舞伎座初演) 三 幕 四 場
- 五十二 井筒業平河内通 (生駒の前、大正五年六月歌舞伎座初演) 三 幕 三 場
- 五十三 新曲安達ヶ原 (長唄所作事、大正五年八月歌舞伎座初演) 一 幕 二 場
- 五十四 女 武 鑑 (福島正則の妻、未上演) 二 幕 四 場
- 五十五 初曆折枝梅 (二人孤兒、未定稿) 六 幕 十一 場
- 五十六 ぬ え 退 治 (未 定 稿) 一 幕 一 場
- 五十七 無 線 電 話 (喜劇、同 上) 同 上
- 五十八 啞 娘 (喜劇、同 上) 二 幕 四 場
- 五十九 鐵のちぎり (喜劇、同 上) 一 幕 一 場

大正十四年六月二十三日發行

「世話狂言傑作集」第五卷

定價 金 參 圓

檢 印



所著 作者權	發 行者	印 刷 者	印 刷 所	發 行 所
-----------	---------	-------------	-------------	-------------

覆 本 茂

東京市日本橋區通四丁目五番地  
和田 利 彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地  
堀 江 關 武

東京市小石川區諏訪町五十六番地  
常 磐 印 刷 所

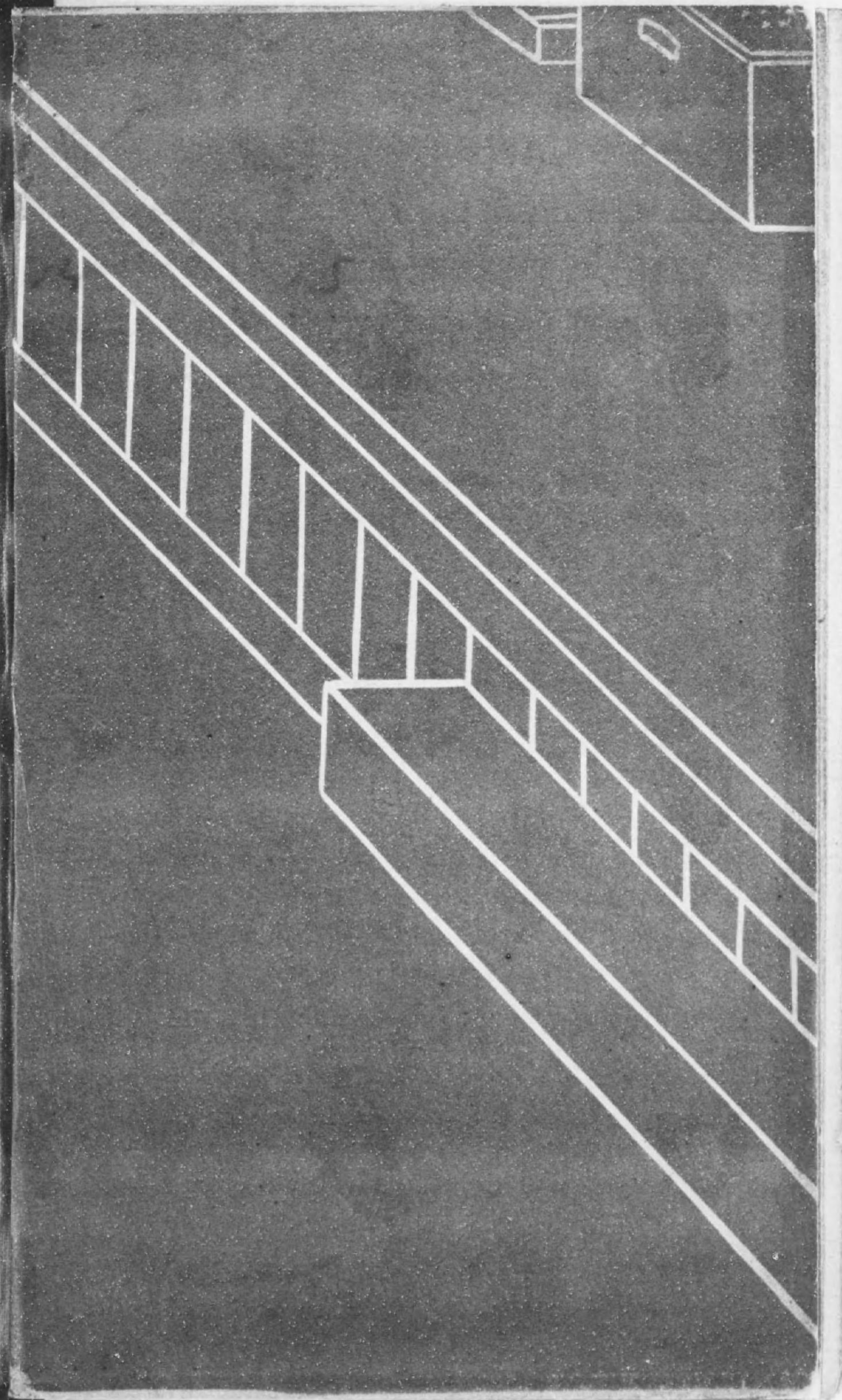
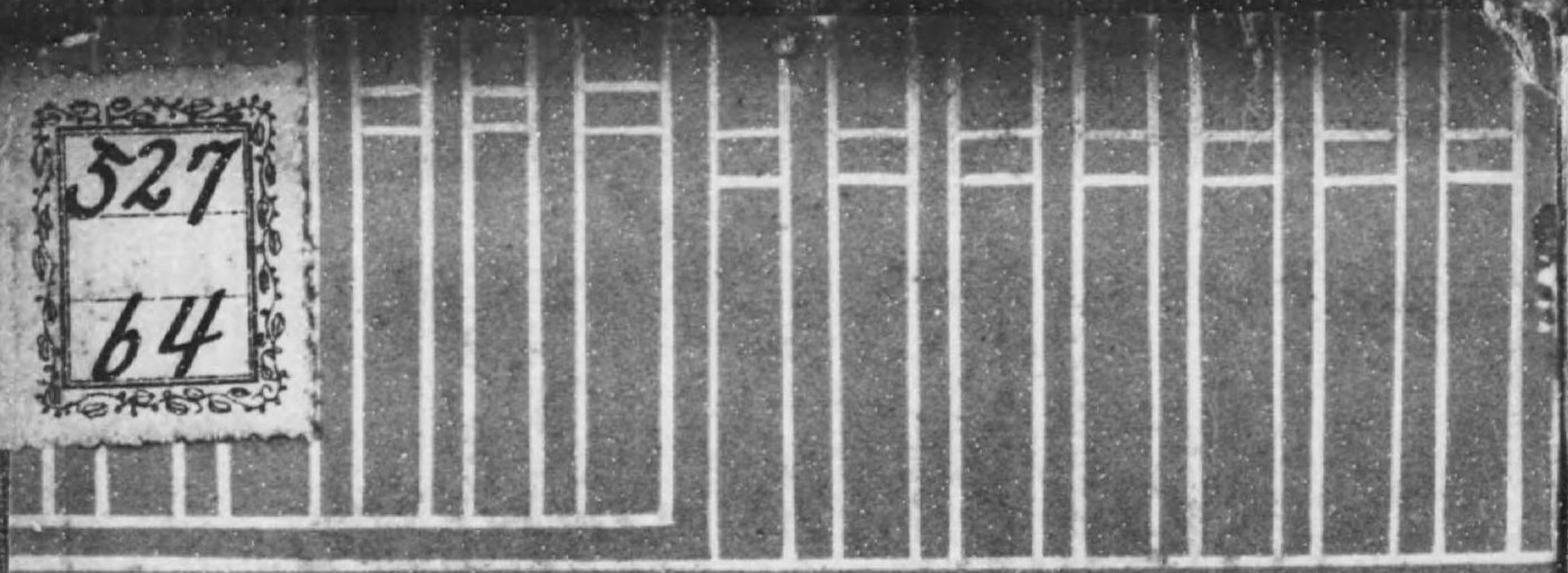
東京市日本橋區通四丁目五番地

春 陽 堂

(電話本局五一七番)  
振替東京一六一七番



327  
64



終

